

国際補助言語としての「グロービッシュ」の可能性：ピジン言語との比較から

真砂 薫

1. 要約

2010年から2011年にかけて、グロービッシュという言葉が注目された。これは、国際共通語としての英語(English as an International Language: EIL)として提案されてきた英語の最新形である。グロービッシュは、過去に提案されてきたEILや人工言語など、異言語・異文化の人々を繋ぐ中間言語に比べて、最もよく現代の英語をめぐる世界状況を反映するものでもある。言語の歴史を振り返れば、異言語・異文化間交流のために発生し、活用された言語は多くあり、それらはピジン言語と呼ばれてきた。本論では、ピジン言語、特にピジン英語とグロービッシュの比較検討を行う。ピジン英語とグロービッシュは、英語非母語話者(非ネイティブ)の英語として共通点も多い。そうであれば、ピジン言語使用者が置かれた社会環境や、英語母語話者および白人支配社会が英語非母語話者に与えた不利益を、グロービッシュ話者は受けないとは言えない。その可能性についても考察を進める。21世紀の世界では、国策として英語を公用語とし、国民の英語運用能力を向上させようという国も多い。グロービッシュもまた、その思潮によって現れたことは確かである。しかし世界的な英語公用語化の動きに問題はないのか。この点を検証し、世界的な英語公用語論を批判的に考察する。

2. グロービッシュの紹介

Newsweek 国際版 2010年6月21日号で、ロバート・マクラム(Robert McCrum)は、グロービッシュの命名者として Jean-Paul Nerriere (以下ネリエール)とその著書 *Globish the World Over*¹⁾ について紹介し、新しい英語のあり方を報じた²⁾。ネリエールは1990年代、日本IBM在職中、英語非母語話者の方が、英語母語話者よりも、日本人や韓国人顧客との英語コミュニケーションがうまくいっていることを発見した。英語非母語話者にとっては、簡単な語彙を用い、場合によっては難解な語彙を言い換えて表現する(例えば nephew=the son of my brother, oath=words of honor のように)ほうが、意志疎通のために英語を使う場面で、特に英語非母語話者間では効率的だという。ネリエールはグロービッシュを言語ツールとしての英語と考え、語彙が1500語だけの簡易英語と定義した。その背景として、ネリエールは次のような例を挙げている。インドの空港で国連平和維持軍の、パンジャブ語を話さないスペイン兵士とスペイン語を話さないインド兵士が、「文

法も構文も無視した極めて簡単な英語」で意志疎通を可能にしていたのである。また非英語圏であり宗教的にも対立するイスラム教徒の、英語圏の新聞が表現の自由を理由にイスラム文化への風刺画を掲載することに抗議した「反・表現の自由」のメッセージは実にシンプルでわかりやすい英語で書かれていた(DOWN WITH FREE SPEECH 打倒! 言論の自由)、という例も挙げている。Newsweek 誌には英語とグロービッシュの表現比較例が掲載されている³⁾。両者は語彙において異なり、アメリカ英語の口語、俗語的な語彙を、平易な英単語に置き換えるとグロービッシュ英語となる。そうであってもグロービッシュ英文を英語非母語話者が自ら書こうとすれば、相当の統語・構文・談話作成能力が必要であり、さらにその基礎には相当の読書量(インプット体験)が必要である。そうなればニューズウィーク誌の述べるグロービッシュ必須語彙はわずか1500であり、「文法も構文も無視しても英語は通じる」というメッセージは誤解をまねく表現と言える。

またマクラムは英語の時代的变化の側面からもグロービッシュを位置付けている。イギリス英語はチャーサーやシェイクスピアの時代を経て19世紀英国帝国主義時代に世界的な覇権を確立する。この第1期英語帝国主義時代、イギリス英語と帝国主義は不可分であった。第2期は第2次世界大戦を契機に、英語のパワーと影響力を行使する主体はアメリカとなる。冷戦期を通じて、アメリカ英語帝国主義は映画、テレビなどのマスメディアを経由して世界的支配言語としての英語のイメージが世界中の人々の意識に入り込む。同時に世界の人々の意識の中に反イギリス帝国主義および反アメリカ帝国主義の意識が育っていった。冷戦の終結と1990年代に続いた好景気は英・米帝国主義の優位性を強めると同時に、英語覇権主義への抵抗感を薄めたとマクラムは考えている。マクラムは21世紀の到来とともに英語覇権主義のイメージは、英米帝国主義のイメージとは分離したものになりつつある。こうして新しい第3期グローバルな英語であるグロービッシュの時代を迎えたと彼は主張する。

帝国主義のイメージから解放された英語は途上国に浸透した。チリやモンゴルは2003年、英語教育を充実させて国民をバイリンガル化させたいと表明した。2006年にはメキシコで英語が必修第2言語としてカリキュラムに加えられ、伝統的フランス語圏のルワンダは2008年、英語を公用語とした。

このようなトレンドの中で、現れた第3期の世界英語は第2言語として英語を使用する人々の英語を指すものであり、英語は英米の英語母語話者の所有から解放されたと考えている。通信手段と交通手段の飛躍的な発達によって、世界はかつてないほど小さくなり、異言語、異文化の人間同士が、意志疎通し協力し、意見交換し調整して、意志決定し結果を出す時代となった。そのような状況の中では確かに英米覇権主義を背景にした英語帝国主義は消え去ったかに見える。

しかしグロービッシュ時代が標榜される一方では、イスラム教圏とキリスト教圏、西欧と非西欧の文明および文化の衝突の時代、という時代定義もまた存在する。具体的には民族、人種を背景にした差別や階級制度を人類が克服したというには時期尚早であることも忘れてはならない。

3. グロービッシュの定義

グロービッシュは今日、国際共通語としての英語の最先端モデルとして注目されている。グロービッシュが注目されるポイントとしては、① 非ネイティブの英語であること、② 表現性よりも論理性を重んじた英語表現であること：そのために意味の明瞭な短文＝単文を基本として、それを接続詞や副詞を論理的展開の指標として有効に使うこと ③ 語彙数の多さを重視せず、むしろ限定的な語彙数（しばしば 1500 語を目安とする）を効率的に活用する ④ 発音は英語母語話者の発音を基準とせず、非ネイティブ話者同士での最低限度の通用性・容認度を重視する、ということが出来る。これをさらに簡単にまとめれば、グロービッシュとは文法・発音を簡便化し語彙数を制限した、半人工的な自然言語であると定義できる。

2011 年現在、日本ではグロービッシュを冠するビジネス書、英語自己啓発書が急速に出版されている。それらのほとんどは学術研究書ではなく、ビジネス自己啓発書と呼ばれる一般図書である。日本において 2011 年現在「グロービッシュ」に関して入手可能な主なビジネス関連図書は次の通りである：

- 1 ジャン・ポール・ネリエール『世界のグロービッシュ 1500 語で通じる驚異』
2011 年 3 月 東洋経済新報社
- 2 阿部川久広『グロービッシュ時代のこれだけ英単語 111』
2011 年 4 月 実業之日本社
- 3 関口雄一『非ネイティブのためのグロービッシュ式らくらく英語勉強法』
2011 年 7 月 日本能率協会マネジメントセンター
- 4 手島直樹『グロービッシュ実践勉強法』2011 年 8 月 日本実業出版社
- 5 関口雄一『驚異のグロービッシュ英語術 通じなかった英語が一変』
2011 年 8 月 高橋書店
- 6 関口雄一『1 日 10 分グロービッシュ学習法』2011 年 9 月 かんき出版
- 7 清水健二『グロービッシュ英単語たった 1500 語』2011 年 9 月 日本法令出版
- 8 関口雄一『多忙社員こそグロービッシュ 完璧を求めない英語』
2011 年 10 月 中央公論新社

- 9 竹下光彦『グロービッシュ入門 苦手な人ほどうまくなる』
2011年10月 サンマーク出版
- 10 関口雄一『グロービッシュの教科書 ビジネスを変える1500語』
2011年10月 毎日コミュニケーションズ
- 11 長尾和夫『グロービッシュではじめるビジネス英語ライティング』
2011年12月 三修社
- 12 阿部川久広『グロービッシュコミュニケーション術 58のビジネスシーンで』
2011年12月 すばる舎

これらの図書に見られ、日本で紹介されるグロービッシュ英語の概要と問題点を指摘しておく。

- ① 語彙1500語が、明確な一定の基準によって選定されているわけではない。ただし、1500語の中に機能語および基本的な内容語は含まれていない。
- ② 文法や統語規則が具体的に示されているものはなく、基本的・日常的な基本文の語彙入れ替えによるパターンプラクティス訓練的な学習が中心である。
- ③ 英語表現の習得はシャドーイングなどの訓練法が紹介されているが、グロービッシュ独自の音声訓練、聴解訓練の方法はない。

そこでまず、続々と出版される図書で紹介されるグロービッシュ英語をどのように考えればよいのか、その枠組みや視点について考察を進める。

4. 国際補助言語という観点から

現在、国際共通語としての英語(English as an International Language、以下EIL)の重要性が話題になっている。EILは、英米人らの母語としての英語とは区別されるべきである。英語教育においては、教育の目標言語(Target language)を、母語として英米人らが使用する英語と考える場合は、外国語としての英語(English as a Foreign Language: EFL)の教育と考えられる。また英米人ら母語としての英語が流通する社会に長期滞在または移住するために英語を習得しようとする場合、目標言語は第2言語としての英語(English as a Second Language: ESL)である。

一般に母語を異にする人々の間で意思伝達的手段として用いられる言語を補助言語(auxiliary language)という。例えば中世やルネサンス期では、ラテン語が補助言語であった。18～19世紀には、フランス語が上流階級の補助言語であり共通語であった。現在で

は科学、貿易、運輸をはじめ学術、医療に至るまで多くの分野で英語が共通語であり補助言語として利用されている。

現在、EILの重要性が話題になっている。EILは、英米人らの母語としての英語とは区別される。英語教育においても同様であると考えられる。またEILはESLとも区別されねばならない。このような区別が明らかになりつつある今日でも、EILの概念が社会的に容認されているとは言い難い。

その中でEFL以外の英語は、英語母語話者にとって、英語の変形亜種であり、不完全な英語に見えるかもしれない。そうであっても、過去に英語母語話者と英語非母語話者、あるいは英語非母語話者同士で使用された「不完全な英語」は存在した。その歴史とそれらの言語的な特徴を、以下で検証する。

5. ピジン言語を含む国際補助言語の歴史

中世ヤルネサンス期の、補助言語としてのラテン語、18～19世紀のヨーロッパ上流階級の補助言語であり共通語であったフランス語のみならず、インドや旧ソビエト連邦内、また旧フランス植民地領域内でも「自然言語」が2地域の日常の交流と意思伝達のための補助言語になっていた。

また一方で、多種多様な言語があることから生じる不便を克服するために、人為的に創造された人工言語がある。17世紀以降創造された人工言語の案は数百にのぼるといわれる。Descartes, Leibnizなどの哲学者は自然言語とは無関係な、論理を基軸とする哲学言語を提案した。しかしそれらが実用性を欠くものであったため、多くはインド・ヨーロッパ諸語の共通の要素をもとに、文法、語彙、発音、正字法を簡略化した人工言語が考案された。主な例は1887年にL.L.Zamenhofが考案したエスペラント語(Esperanto)や、1928年に、デンマークの言語学者のO.Jespersenが発表したNovial(Nov=New International Auxiliary Language：新国際補助言語)などがある。

そしてそれらの中間体というべき「自然言語の人為的な簡略化」の試みとして、英語をもとにC.K.Ogdenが創案したベイシック英語(Basic English)は、半人工言語といえる。

さて、歴史の中で、本当に実用的な目的から発生し、普及し、長く残った言語がある。それらは、異言語使用者間で、いずれにとっても母語でない仲介的な言語である。その中で発音、文法、語彙の単純化が特色をなすものをピジン(pidgin)とよぶ。ピジンは商取引、貿易などの異文化間交流の中で仲介言語として発生した言語であると定義できる。そしてピジンが、特定の地域で土着化するとクレオール言語(creolized language)の段階に入ると定義できる。本論では、クレオール語はピジン語の土着化したものと考え、英語の歴史上に現れた異文化異言語間仲介言語の総称としてピジン語、特にその英語版をピジン英語と

呼ぶことにする。ピジンの典型的な例は、かつて地中海沿岸の諸港で船員、商人、奴隷たちが用いたサビール語(Sabir)と、イタリア語、フランス語、スペイン語、アラビア語などが混合し、発音・文法・語彙の簡略化の結果できあがったピジン言語を上げることができる。他に中国沿岸で発生し、広く用いられた China coast Pidgin English をはじめ、ピジン語やピジン英語は多数存在する。なお、サビール語はリンガフランカ(lingua franca)とも呼ばれる。そしてこれは後に「異なる言語を話す人々の間で使われる共通の言語」という広い意味で使われ、現代では言語学・音声学の分野での国際補助言語を意味する言葉となっている。

グロービッシュとの比較検討のために、ピジン言語の中でも、ピジン英語に注目してその特徴を簡単に確認しておく。

6. ピジン英語の詳細 発音・語彙・文法

ピジン英語の例としては、メラネシアピジン英語(Melanesian Pidgin English: MP)と中国語ピジン(Chinese Pidgin English: CP)がその主な実例として挙げられる⁴⁾。母語としての英米の英語に対して、その発音の特徴は「除去」と「代用」である。ピジン英語の場合、ピジン語話者にとって聞き取れない英語発音は「除去」され、母語によって「代用」される。二重母音や長母音は短母音で代用される。以下、その例である。

CP: de (=day 除去), wik(=week 代用)

MP: fes(=face 代用), tok(=talk 除去)

除去+代用；母語にない子音が除去され近似子音によって代用される

tink(=think $\theta \rightarrow t$), disfela (=this $\delta \rightarrow d$)

他に CP では /r/ を /l/ で代用したり、/r/ の脱落、複数の子音結合に母音を挿入するなどが起こる

(CP: klir \rightarrow kalir =clear)

語彙における特徴は「少数語彙の組み合わせ活用」と「意味の拡大」である。自然言語は少なくとも2万から2万5千の語彙を持つが、ピジン英語は普通700から2000語である。MPの場合、2000の語彙で6000種類の表現が可能であるとされる。以下に具体例を挙げる。

CP: joss 「偶像」 \rightarrow joss house 「寺院」 \rightarrow joss-pidgin man 「僧侶」

MP: gras (=grass) 「草」 \rightarrow 表面に葉上に生えたもの \rightarrow (意味拡大) \rightarrow 「髪の毛」「髭」

文法上の特徴は「単純化；文法関係を表す屈折語尾が単純化され、語順に依存する」という点である。加えて

- 1) 「名詞 1 + 名詞 2」で名詞 1 の目的、特性を名詞 2 が表す
MP: haus moni (house for money = bank)
- 2) 所有を表すのに前置詞 bilong (=of) を多用する
MP: mastar bilong yu (= your master)
- 3) 「代名詞 + 名詞 1 + 名詞 2」で代名詞、名詞 1 は所有格として働く
CP: dat master poni (= that master's pony)
- 4) 動詞の時制の区別がほとんどない。時制は時を表す副詞で表現する。
CP: Hi alredy buy car. (= He bought a car.)
- 5) 否定は、主語 + no + 動詞 で表す。
CP: tumolo maj no ken kam. (Tomorrow I cannot come.)

これらの発音・統語・語彙表現は、当然、英語母語話者からは不完全で稚拙な表現であると受け取れる。そうであっても、例えば発音における母語近似音を使つての代用や母音の挿入などは、英語非母語話者である日本人の英語発音に見られる特徴である (light=laito, truck=tolakku など)。英語非母語話者の英語発音における子音除去や母語近似音代用は、英語非母語話者に共通する特徴であり、除去、代用、変形は、後に示すように人間言語に普遍的な言語行為であるとさえ言える。したがって英語非母語話者の英語の特徴を、「人種・民族的な劣性である」とする母語話者の考えや、英語母語話者による「ネイティブチェック」や母語話者の言語的直観 (native intuition) への信頼を非母語話者である外国人が持ちすぎることは、「英語ネイティブ神話」を作り英語覇権主義に通じる危険をはらむものである。

7. ピジンとグロービッシュ その1

ピジンとグロービッシュを比較すると、その類似点と相違点が明らかになる。類似点は、次の通りである。① 語彙の制限あるいは少なさ；ともに語彙が少なく、意識的に、また実際的な使用の場面や必要性から、語彙を少なくしている。② 文法構造が単純化され、文法構造の複雑なものは避けられ、簡単に明快な構造の文が多用される。③ 発音については、英語母語話者の発音が基準にならない；非ネイティブの、自分の母語の発音の影響を受けた発音で運用される；したがって英語母語話者の標準的な発音という「最高レベル」を志向するのではなく、英語母語話者と非ネイティブ、あるいは非ネイティブ同士

での、「最低限度レベルでのコミュニケーションが実現する」ことを志向する。

それに対して、ピジンとグロービッシュは次のような相違点を持つ。①ピジンは様々な時代に、主に植民地を中心とした様々な場所で、英語のほかにフランス語やスペイン語などの宗主国の言語と様々な現地語が混合する形で作られた補助言語であるのに対し、グロービッシュは基本的に国際経済が発達した、フラットで対等な関係性の保証された世界のなかで多用されることになった英語を軸に、様々な非ネイティブの母語の影響を受けた、まさに国際共通語としての英語の一形式である。② ピジンは例えば奴隷対雇い主などの上下関係のなかで、強制的な言語使用の状況下で発生した言語であるともいえるのに対し、グロービッシュは、基本的に、また理念的には対等な国際的経済活動の状況下で使用される言語であり、使用者は国際的経済活動に参加しようと自ら意図した場合に、コミュニケーションにおいて最も効率の良いグロービッシュという英語を選択した、といえる。(ただしすべてのピジン言語が、使用を強制された状況の中で発生、普及したものではなく、太平洋北西部、南西部の港町を中心に商取引の目的で使用された中国語ピジン(Chinese Pidgin English)は、むしろ現代のグロービッシュに近いものである。)③ ピジンは、その使用を強制された非ネイティブにとっても、またコミュニケーションの必要から、「伝わらないよりはまし」と考えた宗主国の支配者側の人間にとっても、「言語としては周縁的な存在」であったのに対し、グロービッシュが周辺言語(marginal language)であるという意識は、ピジンに比べれば希薄である。むしろ先進諸国が使用する主要言語であるという意識から、グロービッシュは、英語であるがゆえにある程度のステータスが与えられていると考えられる。

ピジン語については、Jespersen (1922)⁵⁾や Bloomfield (1933)⁶⁾が学問的にピジンの重要性について述べているものの、1950～1960年代になってピジン語の研究が盛んになるまでは、ピジンは、不完全で寄せ集めの破格言語であり、劣等言語である、と Hall (1964)⁷⁾は考えていた。

この点に関しては、ピジンの発生に関する仮説に関連して、注目すべきことがある。ピジンの発生過程が、幼児が大人に向かって、また大人が幼児にたいして話す場合の言語に類似している、というものである(ピジン＝幼児言語習得説)。幼児の言語のみならず、大人が幼児に話しかける場合にも、音声、意味、文法において不完全な言語を使用することが観察される。このことから Jespersen や Bloomfield はピジンの発生過程が幼児の言語習得過程に類似していると、指摘した。これはピジンを不完全な破格言語であり、劣等言語であるという考えに通じるものである。

他方で、ピジンやグロービッシュにも見られる「言語の単純化」は、幼稚下等なことではなく、人間の普遍的言語行為に見られるものと考えられる仮説もあらわれた。人間には、

(個別言語ではなく) 普遍言語を習得する能力が生得的に備わっていて、その能力の中に、ピジンやグロービッシュにも見られる「言語接触という状況における言語の単純化」というプロセスがあり、世界各地、すべての大陸に見られる「すべてのピジン語の類似性」を説明できることになる。語彙の制限や、言語構造上の単純化は、遺伝的、生得的に人間に備わった普遍的言語規則に由来するとすれば、19世紀的博物学的なアプローチとして「ピジン祖語 (があって、すべてのピジン言語はピジン祖語から派生した、その祖語)」を探そうとする、過去にあった学術的努力は不要なものとなろう。

単純化=言語普遍性の仮説は Todd(1969)⁸⁾に始まるが、変形生成文法の考え方にも通じるものである。学術的なアプローチから、グロービッシュを含めピジン語が、周皮的で破格・劣等言語であるという見解から解放され、グロービッシュやピジン語を劣等言語であるとする考えが社会言語学的あるいは制度言語学的に批判されるべきである。

しかしグロービッシュとピジン英語の類似点と相違点のみを列挙して、グロービッシュの考察を終えるわけにはいかない。特に相違点として、植民地帝国主義時代とグローバル・ボーダーレス化する現代という時代性の差を指摘することは容易である。しかし、時代を超えてなお、グロービッシュの中に、ピジン英語が内蔵した問題と同質のものが含まれているのではないか。

ピジンが破格言語であり劣等言語であるということと、グロービッシュが、効率化され、国際的な使用に向けて改良された半人工言語であるということが、どのように関連付けられるのか。経済や科学技術の国際化の結果として英語が国際社会の共通語として流通したのは、英語の最大の使用国であるアメリカが、経済力あるいは軍事力において、冷戦時代には二極のうちの一極をしめ、旧ソビエト連邦崩壊後は、一極集中的な地位をアメリカが得たという世界情勢があったことを忘れてはならない。また、英語が他の欧米諸語にくらべて、活用変化などの文法的複雑さをいち早く捨象したことも、英語が世界的に普及した一因と考えられる。いずれにしても、世界は英語を受け入れざるを得ない状況にあったという点においては、時代の列強国の言語を軸として現地語の干渉と言語の簡略化がブレンドされて、不完全版であり劣化版の言語としてピジンが現れざるをえなかったことと、グロービッシュの発生は、きわめて類似しているといえる。

8. ピジンとグロービッシュ その2

そうであっても、グロービッシュが必ずピジン化し、破格言語・劣等言語とされるとは断言できない。グロービッシュが「過去のピジン言語の最新版ではなく、人類史上初の真の国際補助語となれるかどうか」は、次の点にかかっているといえる。

グロービッシュが不完全で劣った変形亜種英語にすぎないと考えるのは、ほかならぬ英

語母語話者であり、ヨーロッパ系白人英語母語話者である。また彼らが既得権として持つネイティブ英語の優位性は、残念ながら非英語圏の非ネイティブ英語話者さえもが、意識的に、あるいは無意識に認めている。ゆえに現代日本においても、英語ネイティブ優位神話があり、英語帝国主義が、最近批判され始めたとはいえ、根強く残っている。これらの要素が世界的に排除されない限り、グロービッシュは、劣った、あるいは特殊な英語であるという地位から抜け出せないであろう。つまりグロービッシュはピジン化するのである。なぜならば、過去にピジン語もまた通商混成語(trade jargon)としては一定の評価をされていたのであるから。

したがって、過去の様々なピジン語と同程度にまでは、グロービッシュをはじめ、現在存在し流通している海外英語(overseas English)が、一定の地位を保ち、過去にくらべてグローバル化し遥かにボーダーレス化した現在の世界の中で、普及するだろう。ビジネスという土俵の上に限定し、商取引で成功し、高い利益を得ることを、共有の価値と考える国際ビジネスパースンたちの間では、一般社会では社会階層格差が依然として存在することは、もはや問題にはならないだろう。国際ビジネスの世界に参加することは、旧来の社会階層制度を打破する方法である。インド社会に残るカースト制度という社会階層の壁を破る数少ない方法はIT技術の習得であり、IT技術者になることであるのと同じ原理が働いている。そうであっても、グローバル化とはアメリカ化と同義であると考えればどうか。IT技術世界と同様に、ビジネス世界もまた、極めて限定的な、アメリカ的な自由と成功のある世界だと考えればどうか。その「限定的な自由世界の外」では、依然として、人間は、英語に関して、グロービッシュを使いつつ、必要に応じては、英語母語話者のなかでも教養があるとされる階層の標準英語をも使うという、二重方言使用(bidialectalism)を行い、Code-switchingをしなければ、社会的に不利益や差別を被るのではないか。そうであれば、グロービッシュを真の国際共通語と考えるのは時期尚早であると言える。

人間の言語使用は、言語Aを使うか、Bを使うか、あるいはAの使用を禁止されたからBになった、という単純なものではない。ピジンにせよ、グロービッシュにせよ、人間は言語の選択や使用をめぐるさまざまな状況のなかでどのような判断や、どのような使い分けをするのかという問題について、についてさらに考察を進めよう。

9. 言語生態学の観点から

言語生態学(linguistic ecology)の提唱者 Voegelin(1967)⁹⁾は、言語生態学を通じて、多言語使用地域における各言語のあり方を研究しようとした。彼らは言語を機械的構造物のように意図的に構築されたものではなく、人間の行動(behavior)が示す様々な側面(aspects)からとらえようとした。言語の生態は行為として現れ、可能性として存在する。

言語は複数の体系を内蔵し、言語は言語使用者間の相互影響関係の中に成り立つことを前提に彼らは研究を進める。その分類記述の体系として、言語生態学の提唱者たちは、媒介変数要因として、地位意識(status、略S)と親近感(intimacy、略I)を設定した。Sは社会階層関係であり、上流言語(H)は+Sであり、下層言語(L)は-Sである。Voegelinの報告例ではパラグアイのグアラニ族は公式の場ではスペイン語を使用し、くつろいだ場ではグアラニ語を使う。この言語対立は+S/-Sと表記できる。

さてこの表記を言語構造的な客観性からのみ考えればSとIが、完全な対立条件でないことが不十分な点となる。+Sは地位意識が高く、例えば、公文書や教育現場での言語にあたる。そうであっても、+S言語のなかにも、+S/-I(地位意識が高いだけに、親近感は低く堅苦しく冷たく感じられる)であったり、+S/+I(確かに上流階級に馴染みのある表現で、自分がそれに慣れているため親近感もある)であったりする。この分類では、ピジン言語は、上流、下層のどちらの階層にとっても、-Sであるが、上流階層にとっては-I、下層階級にとっては+Iとなる。

Stewart(1968)¹⁰は言語の特性として、1)標準化(standardization)、2)自律性(autonomy)、3)歴史性(historicity)、4)活力(vitality)の4つの特性を使い、いくつかの型を記述した。例えば標準語型(+1,+4)(標準化されていて、大いに活力がある)、古典語型(+1,+3)(標準化され、大いに歴史性がある)、人工語型(+1,+2)(標準化され、やや活力もある)、地域口語(vernacular)(+2,+4)(よく標準化され、大いに活力もある)、方言型(+3,+4)(その地域では大いに標準化され、強く活力的である)、などである。問題のピジンあるいはその土着形であるクレオール言語については、Stewartの分類では、クレオール言語型(+4)(強く活力、だが標準的ではなく、自律性や歴史性もない)、ピジン言語型(すべてマイナス)ときわめて評価が低い。この評価法は地域の社会言語学的側面から言語を記述するには有効である。しかしこの評価記述法では「地域口語」「方言」「クレオール言語」の微妙な差異は表示しにくい。それでも標準化という要素を欠くということは、言語としての威信(prestige)を欠くことになることを意味する。「口語」「方言」「クレオール言語」は歴史性を認められ、その存在を認識されているものの、共時的な相違はわかりにくい。

さらに言語生態学的には、言語使用社会で、その構成員がどのように2言語を使い分け、その2言語は安定的か、推移的か、などの言語のダイナミックな側面、つまり言語生態学の中心的な観察対象をとらえにくい。例えばグロービッシュは、国際ビジネス社会の構成員にとっては+Iだが+Sとの判断は誰が下すのか、疑問である。またグロービッシュは、1)標準化(standardization)、2)自律性(autonomy)、3)歴史性(historicity)、4)活力(vitality)の4つの特性について、2)と4)は+1以上であろうが、3)は未定

であり、1) の評価をピジン言語ほどにも未だ獲得していないだろう。

言語生態学から明らかになることを端的に言えば、グロービッシュがどのようにピジンに類似しているか、または真の国際共通語、新しい国際補助言語、世界の間言語になるかを論ずるのに、言語学的記述主義では記述しきれないものが残る。また本論の目的は、グロービッシュの学術的記述だけではないのである。世界の人々が複数の言語を使用する（また使用せざるを得ない）状況にあるとして、その時人間はどのような言語の選択と使用をするのか、についてさらに考察を進める。

10. 2方言併用をめぐる

英語の変形という観点からみれば、アメリカ国外のピジン英語に対して、アメリカ国内の英語の変形亜種として、黒人英語が考えられる。そして黒人英語を考える時、ピジン英語さらにはグロービッシュを考える重要な観点が見つかる。英語に簡易型を含めた変形亜種が発生した場合、それらの変形亜種は、英語母語話者とりわけ社会的地位が高い白人話者からは決して評価されないということである。社会的地位の高さは、個人が受ける教育・教養の差を反映し、その結果である学歴の差となり、学歴や社会的実績を手に入れて初めて入ることを許される社会階層内の地位に現れる。それを考慮すれば、簡易型を含めた変形亜種英語の話者は、意思疎通ができるという利を受ける反面、その個人が使う変形亜種英語ゆえに差別され不利益を被ることを逃れられないのである。Stewart(1967)¹¹⁾は次のような研究報告を行っている。アメリカの黒人英語のなかにも、上層黒人英語(acrolect)があり、これは教育のある白人の標準語に構造上、非常に近い。これとは別に基底黒人英語(basilect)がある。恵まれた環境に生まれついた黒人を別とすれば、黒人の子供は、小学校入学前には、自分の生活環境で身についた基底黒人英語を話すことが多い。しかし小学校入学とともに、教師や標準英語に近い英語を話す他の子供との接触によって、基底黒人英語は修正され上層黒人英語に近づく。しかし14～15歳になり、学校を卒業または中退することで、基底黒人英語に戻ってゆくという。また家族や黒人同士では基底黒人英語を使い、白人社会では上層黒人英語を使うという、黒人英語の切り替え(Code-switching)がある。しかもこの切り替えは流動的であり、黒人英語をとらえ難いものになっているという。黒人英語の2方言併用(bidialectalism)が意味することは何であろうか。

アメリカ社会で、黒人が2種類の英語の使い分けを強いられたことは、つまり人種的な差異を基本とした英語階級社会の存在を暗示している。社会階層格差が英語の差を生み出したことは事実であろう。しかし一度、社会階層格差が出来上がってしまうと、英語の差が、社会階層的差別を生み出す。したがって英語非母語話者としての外国人が外国語とし

て英語を習得しようとするとき、どの社会階層の標準語をモデルとして言語習得するか、が大きな問題となろう。

なお、2方言併用と言語差別の問題は、アメリカ黒人英語に限らない。インドでは広域的な共通語としてヒンディー語、ウルドゥー語、ベンガル語、パンジャブ語、タミル語、シンハラ語があるが、インド全土の共通語にならなかったため、共通補助言語として英語が機能した。しかしこの英語を英国人は Babu English, Cheechee English とよび、英語を使用することと人間として対等であることは別であった。標準英語と現地英語の2英語使用こそは白人・英語母語話者優位の象徴であった。南アフリカにおいても、18世紀以来、オランダ語簡略体言語であるアフリカーンス(Afrikaans)が白人以外の現地人に用いられていた。19世紀ボーア戦争以後、英国が主権を得て、英語が商工業用共通言語となったあと、標準英語とアフリカーンスの影響を受けた南アフリカ英語が用いられ、英語2方言併用状態が成立した。しかし英語が公用語となって、英語話者が全て社会での活躍を約束されたわけではなかった。つまり英語が共通語として社会に流通することで、英語覇権主義が強められこそすれ、英語による公平平等なグローバル競争社会は実現されなかった。この状況は東アフリカでも同様であった。この地域ではスワヒリ語(Swahili)が共通語であったが、近代化とともに、英語は文化語としてエリートに学ばれ使用された。これは英語の使用が、民族をエリート階層と大衆階層に分断し、識別するために機能した例と言える。また西アフリカのリベリアは、アメリカ黒人の入植地であったため、英語は最初からアフリカ民族の母語とは別に、英語圏からの入植者とともに流入したのであり、この場合英語は文化的に何の貢献もしていない。ピジン英語が用いられるナイジェリアやガーナにおいても公用語である英語は文化語でありエリート語であって、第1言語は現地土着言語である。そのため現地語やピジン英語の影響を受けた新英語(New English)は、公用エリート英語とは別の英語であり、ニュースや大衆小説の言語となっている。アフリカの英語事情を検証しても、英語は社会階層や人種の差別を残存させこそすれ、英語の習得が差別や格差の解消に貢献することは無いと言えよう。このような歴史を考慮し、英語母語話者ではない日本人を含めた英語非母語話者は、どのような英語を習得すれば、どのような結果を得られるかを予測できる。それを整理すれば、次のような場合分けと結果が予想される。

- ① 母国でも社会的地位が高い外国人が、相手国の社会的地位が高い言語を習得する場合：社会的に差別され不利益を被る可能性が、もっとも少ない。
- ② 母国でも社会的地位が高い外国人が、相手国の簡便化された言語を習得する場合：教養を疑われるかもしれないが、外国人の使う言語の拙さとして好意的に理解され、大きな不利益を受けることはないかもしれない。
- ③ 母国では社会的地位が普通または低い外国人が、相手国での社会的地位が高い言語を

習得する場合：学習の苦勞に見合う利益をある程度得られるかもしれないが、社会階層的、あるいは人種的差別は超えられない。ただしグローバルビジネスなどで、個人の話す内容に説得力があり論理的であり、優れていれば、同業者の間では高い評価を受けるかもしれない。

- ④ 母国で社会的地位が普通か低い外国人が、簡便化された相手国の言語を習得した場合：社会的な不利益を受けることは避けられず、加えて人種的な差別も強く受ける可能性がある。

このような分類が可能なのは、英語が発音、語彙、文法を備えたという意味での人間言語の一つである前に、その英語がいかなる民族、人種や階層によって使われる英語であるか、が重要な問題なのである。「どのような種類の英語が存在するか」が問題なのではなく、「どのような人種、階層がその英語を使っているか」のほうが、重要度の高い問題なのだ、と言える。世界の英語に関する問題を、その観点から掘り下げ、現代の英語帝国主義、言語による覇権主義に考察の中心を進めよう。

11. 英語帝国主義批判に関連して

この問題の本質を津田幸男はその著書『言語・情報・文化の英語支配』¹²⁾のなかで的確に論じている。英語使用世界は階級社会であり、① 構成人数は3～4億人であり決して最多ではないが最高位の「特権表現階級」（英語のネイティブスピーカー）、② 英語母語圏内で生活・経済活動を英語で行う構成人数10数億人とほぼ最多である中流表現階級（英語第2言語話者）、③ 英語を外国語として使うが、英語の運用レベルに関係なく、英語母語話者や英語圏での実生活者とは差別される「労働者表現階級」、④ 英語との接触が無く当然英語を使えず、生活で使わない「沈黙階級」、の4つの英語における社会階層がある。この階級世界の中では、日本人を含め世界中の英語非母語話者は、英語を学び英語をある程度流暢に使ったとしても③の階級からさえも出られないと津田は結論づける。英語非母語話者である日本人は、グロービッシュを習得し、それ以上の英語を駆使しても、英語階級世界の尺度から論じれば、第2階級にすら、なれない。この仮説は英語をめぐる世界のモデル（縮図）であり、日本における英語教育議論でしばしば忘れられる世界観である。

英語帝国主義批判は英語非母語話者だけから主張されているのではない。レオ・パニッチ&サム・ギンデンは『アメリカ帝国主義とはなにか』¹³⁾において、グローバリゼーションとはアメリカ帝国主義の世界的な展開であると批判している。グローバリゼーションが進めば進むほど、現在世界に存在する6000の言語が21世紀末には50%以下になり、最悪で90%絶滅するとされるその元凶は、アメリカ・英語帝国主義であるという。英語の一極

支配は効率的ではあるが、その負の側面を批判的に考察することが重要である。

12. 国際語として必要な英語のビジョン

水村美苗の『日本語が減びるとき—英語の世紀の中で—』¹⁴⁾の指摘によれば、日本人総バイリンガル化は無謀で無知な議論であり、日本の取るべき政策は一部国民の徹底した英語教育による部分的効率的バイリンガル化である、という。しかし一方で国策として、国際社会の中で日本国が生き残り、繁栄するためには国民の英語運用能力を高めなければならない、そのために学校教育の制度的改革も必要であるという主張がある。しかし水村はその根拠が示されておらず、日本国民の多くが、日本の英語公用語化政策に、気分的に同調していることを危惧している。水村は、英語をかなりのレベルで運用しなければならない人間の数は、たとえ世界がグローバル化し、ボーダーレス化しても決して1億人にはならないとする。逆に1億をグロービッシュ程度の英語でも運用できるようにするには、莫大な予算と人手と時間がかかる、という。現在、反・英語公用語論も日本では現れてきている。

成毛真(2011)¹⁵⁾は、次のような試算を行っている。外務省の海外在留邦人統計では、3か月以上外国に在留する長期滞在者数は2009年時点で、76万人であり、そのうち非英語圏である中国に12万7000人、ブラジルに6万人、ドイツに3万7000人、フランスに3万人が滞在する。1990年度の長期滞在者数は37万4000人であるので20年間平均では年間56万7000人の日本人が海外に滞在していることになる。仮にこの長期滞在者が平均4年間海外で生活するとする（これは留学や長期赴任の期間から仮定した）。そこで4年に1度長期滞在者が入れ替わると計算し、5歳から80歳までで海外に4年間は住んだ人は約1077万人となる。これに外資系企業の従業員数102万人（経済産業省2004年度統計）、観光や交通機関関連の従業員を100万人と概算して、全部を足しても、1279万人である。日本の人口を約1億2795万人（2011年6月確定値）とすれば、英語を教養・学歴としてではなく、日常的に必要な道具として必要とする日本人は、人口の1割であることがわかる。したがって、残り9割の日本人は、実際の必要性からではなく、英語が必要であろうという強迫観念から英語力の獲得を求めていると考えられる。さらにこの強迫観念あるいは共同幻想を、英語教育産業が利用し生計を立てていることを忘れてはならない。9割とは言わないまでも、半数以上の日本人は英語教育産業や英語教育従事者の生計を維持し、社会経済の不安定化を起こさないためにのみ英語必要論が存在するのであって、実際の需要・必要から英語教育が供給されようとしているのではない、ということは確認しておきたい。

したがって国益・国策的英語普及論の問題点は、現実の世界における英語のあり方に無

知であり、数値的な根拠のない、夢想的な英語＝国際共通語論が独り歩きしていることである。また日本は現実の国際社会における英語格差、言語差別を考慮した、一国の言語政策のビジョンを持たないことが問題である。日本の一般社会で普及しつつあるグロービッシュは、それゆえ、習得の容易さばかりが注目されてはならない。習得の簡単な英語の獲得が、無駄とは結論しないまでも、国際社会や英語圏において、不利益や差別を受けるリスクを考慮に入れるべきである。国際社会で生き残るためには、外国語の習得が重要なのではない。外国語とは何か、母国語とは何か、自分は何を考え、何を伝えることができるのか、自分の中になる思想、アイデア、アイデンティティー、オリジナリティーは何かを、まず母語で表現できなければならない。言葉で伝えるべき内容(contents)が自分にはあるのか、それを自問することから始める英語ビジョンが求められている。

グロービッシュが新しい国際共通語としての英語になれるかどうかの可能性は、グロービッシュ英語をピジン語と比較し検証することだけから考えることはできない。英語圏の人間であっても Quirk(1981)¹⁶⁾は、英語がグローバルに使用されている現代ではアメリカ英語、イギリス英語など個々の国々の英語にとらわれない核英語(Nuclear English)を提唱している。この考えのもと、標準英語(Standard English)とは何か、という問いから始まる。歴史的に考えれば、その起源は英語を母語とする国の事情に遡る。制度言語学的に言えば、英語についての時代的差異でも、地理的差異でもなく社会階層的差異が、標準英語の決定に大きく影響していることは注目すべきである。Quirk は、標準英語とは、地域や国といった共同体に限定されず、より広い範囲で英語を使用する国の話者と意志疎通をはかりたいとき求められる表現媒体であり、根本的には一つの理想形と考えた。このように英語母語話者自身が意識を変え、自ら英語帝国主義を否定するならば、そしてそれが今後の世界で実現されるならば、英語の理想形としてグロービッシュ英語が発展する可能性はある。

13. 結論

ネリエールが提唱したグロービッシュという英語は、新しい国際共通語であり、世界の人々にとっての国際補助言語になる可能性を持っている。グロービッシュは、語彙数が少なく、また制限した語彙の中で表現を作ろうとする。発音、文法においても、制限は極めて緩和される。そのことは、国際共通語としての英語が、英語母語話者の英語とは区別されるべきであり、非母語話者こそが主体となる英語、という認識が、今の世界で成熟しつつあることを意味している。しかしグロービッシュを「簡便な英語」とだけ定義することは危険である。英語の歴史の中では、ピジン英語を含め、非母語話者の言語であるピジン言語、それが普及し土着化したクレオール言語が存在した。それらもまた複数の言語が混

合し、簡易化した言語であり、異文化・異言語の人々の間で使用された中間言語であった。したがってグロービッシュが人類最初の国際的な補助言語であるという予想を今、持つことはできない。しかし、グロービッシュに類似したピジン言語から学ぶべきことは多い。しかしピジン言語は英語の社会階級差別を克服できなかった。世界各地に存在した過去のピジン言語は、過去の、植民地宗主国、主要先進国の欧米語にとっての、「劣等言語」であるという認識から自由になることは難しかった。現代世界は、交通手段、通信手段の飛躍的な進歩のおかげで、新しい段階に入った。しかしそれが直接、グロービッシュの国際共通語としての地位を保証するものではない。日本を見ればわかるように、世界には先進的な国家であっても、外国語をふくめた言語に関する認識が低く、言語政策議論も未熟な国がある。そのような国においてグロービッシュに注目が集まるとしても、それは習得の容易さ、という一面に注目しているにすぎない。国際共通語に関する認識の低さや議論の未熟さこそを、グロービッシュブームは、象徴している。

注

- 1) Nerriere, Jean-Paul & Hon, David .2009. *Globish the World Over*. Antecka.
- 2) Newsweek June 21, 2010. “A New Language for a New World” by Robert McCrum. pp.32-35.
- 3) American: Native English speaker can't quite hack it when they need to dumb down the 1,500 key words. The language they have to speak or write is expected to be kosher, if not perfect.
 Globish: Native English speakers have great difficulties when they want to reduce their words down to the 1,500 key ones. On top of that, the language they have to speak or write is expected to be correct, if not perfect.
 (Newsweek June 21, 2010, p.35.)
- 4) 本論で挙げたピジン英語の例は、大塚高信・中島文雄 監修 『新英語学辞典』 研究社、1982、中島平三、瀬田幸人 監訳 『オックスフォード言語学辞典』 朝倉書店 2009 からその典型的な例を採用した。
- 5) Jespersen, Otto. *Language: Its Nature, Development, and Origin*. London: Goerge Allen & Unwin.
- 6) Bloomfield, Leonard. 1933. *Language*. New York: Holt Rinehart & Winston.
- 7) Hall, E.W. 1964. *Categorical Analysis: Selected Essays of Everlett W. Hall on Philosophy, Value, knowledge, and the Mind* (ed. E.M. Adams) Chapel Hill: Univ.

- of North Carolina Pr.
- 8) Todd, W. (ed.). *Studies in Philosophical Linguistics. Series One.* Evanston, III.: Great Expectations.
 - 9) Vogelin, F.M. & N.W. Schutz, Jr. 1967 "The Language Situation in Arizona as Part of the South-west Culture Area". in Hymes & W.E. Bittle (eds.) *Studies in Southwestern Ethnolinguistics.* The Hague: Mouton.
 - 10) Stewart, W.A. 1968. "A Sociolinguistic Typology for Describing National Multilingualism". in Fishman J.A. (ed.) *Readings in the Sociology of Language.* The Hague: Mouton.
 - 11) ——. 1967. "Sociolinguistic Factors in the History of American Negro Dialects", *FFLR* 5:2, pp.11-22, 24, 26, 30. (The Florida FL Reporter).
 - 12) 津田幸男編著 (2005) 『言語・情報・文化の英語支配』 明石書店 p.154。
 - 13) レオ・パニッチ&サム・ギンディン (2004) 『アメリカ帝国主義とはなにか』 渡辺雅雄訳 こぶし書房 p.136。
 - 14) 水村美苗 『日本語が減びるとき—英語の世紀の中で—』 (筑摩書房、2008) pp.276 - 279 参照。水村英語論は国策としての「国民総バイリンガル論」には再考の余地があることを指摘し話題となった。
 - 15) 成毛 真 (Naruke Makoto) 『日本人の9割に英語はいらない』 祥伝社 2011。
 - 16) Quirk, Randolph. 1981. "The Concept of Neuclear English" in L.E. Smith (ed.) 1981. *English for Cross-Cultural Communication.* London: Macmillan.